日中社会学会『21世紀東アジア社会学』第6号(2014年3月)(電子版) ISSN1883-0862

論　　文

東アジアにおける越境結婚の連鎖
--送り出し国から受け入れ国に転換しつつある中国の事例を中心に--
Marriage Migration Chain in East Aisa
Focus on the process of China turning to a receiving country

郝　洪芳(Hao Hongfang)

キーワード：東アジア移民、越境結婚、連鎖的婚姻移住
East Asian Migration, Cross-border Marriage, Chain Marriage Migration

要約：东亚各国家地区间长久以来存在跨境婚姻移民问题。宏观角度观察几十年来的跨境婚姻移民趋势，发现其呈现连锁状态。所谓“连锁”，即先是从韩国与台湾地区向日本的婚姻移民移动，随后是从中国大陆与越南等向日本，韩国，台湾地区移动，而近些年来转变为越南，柬埔寨等向中国移动。本文的研究对象即为正在进行中的越南女性跨境婚姻移民向中国流入的现象。通过对中介与婚姻当事人的实证调查，将流入分为两种不同类型，详述其流入的过程并分析其成因。发现越南向中国的婚姻移民流动与中国等向日本，韩国，台湾地区的婚姻流动有不同之处。主要是既存的跨国中介网络与日益发达的网络媒体发挥了前所未有的作用。并且多年来越南流向韩国，台湾地区，使得语言与跨国人际关系得以发展，而这些都促进了越南向中国的流动。而中国男性一方，也因为女性向外国的流动造成在婚姻市场上相对被动的地位。即使城市中的一部分大龄或离婚男性也因为中国近年来配偶选择标准的变迁而面临结婚难，因此选择尝试与越南的跨境婚姻。

１．本稿の目的

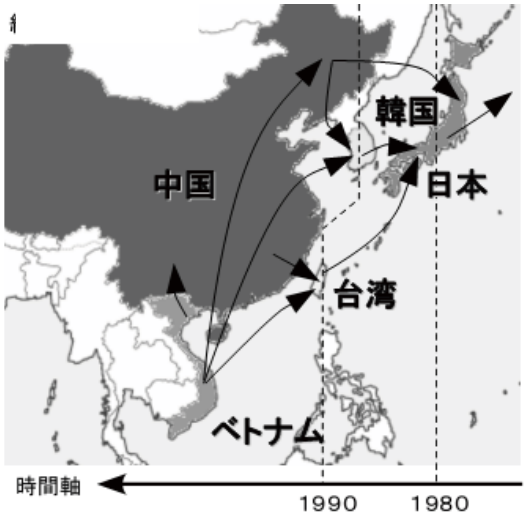
東アジアにおける人の移動の中で、越境結婚[1]という再生産領域の移動が注目されてきた。第二次世界大戦後からの越境結婚移動を歴史的にみると、最初に米軍と結婚してアメリカなどに移住した「戦争花嫁」や、南米に移住した男性と写真でお見合いして結婚し、ブラジルなどに移住した日本人女性「写真花嫁」が存在していた。それから、1975 年に日本では日本人男性と外国人女性との国際結婚件数が初めて日本人女性と外国人男性との国際結婚より多くなった。その時、日本人男性の国際結婚相手のほとんどが韓国人と台湾人だった。つまり、国際結婚の大半がアジア間の結婚となった。また、1986 年に山形県で嫁不足対策としてフィリピン人女性を受け入れたことに象徴されるように、1980 年代後半から「農村花嫁」として東南アジアや韓国、中国などから日本に入るようになった。1990 年代になると、それまでに一番多かった韓国人が減り、中国人女性の急増が目立つようになった。

1990 年代に入ってから、それまで日本に女性を送り出した韓国と台湾は受け入れ地域に転換した。主に中国大陸とベトナムからの女性配偶者を受け入れるようになった。1992 年に韓国と中国が国交を樹立し、韓国の一部の地方政府主導で農村花嫁不足解消を狙って

朝鮮族花嫁を迎えた。それから中国籍女性との結婚が都市部にも広がり、最多数となっている。台湾では 1987 年に中国大陸への親戚訪問、1990 年に中国大陸への投資が許可されてから、中国大陸人との結婚が増加していた。全体の中で一番多くなっており、そのつぎがベトナム人である。

このように、東アジア間における越境結婚は連鎖的に起きている。韓国と台湾が日本への送り出しから受け入れ地域になったことを「第一の転換」と呼ぶなら、いま「第二の転換」が起きていると言えよう。つまり、中国大陸から日本や韓国、台湾への送り出しが減少しつつ、2009 年頃からベトナムやカンボジアからの結婚移住者を多数受け入れるようになってきていることである。このような連鎖と転換を図−1 でわかりやすく示そう。

本稿の目的はこの「第二の転換」に注目し、ベトナム女性配偶者を受け入れる状況を中心に、その実態と特徴を明らかにし、転換の原因を検討する。この新しい状況を明確にすることによって、東アジアにおける移民問題に新たな貢献をしたい。



図−1　東アジアにおける越境結婚の連鎖

２．先行研究

越境結婚問題は学際的な関心を集め、多くの研究がなされてきた。それらを大きくわけると、以下の三つの観点から研究されている。

まずは越境結婚の形成要因に関する議論。受け入れ国と送り出し国の間に存在している経済格差がその一つの要因として、多くの研究で指摘されている（宿谷 1988、佐藤 1989、夏 2002）。また、結婚あるいは家父長制的諸制度などの社会文化的な要因（伊藤 2002）や出身国における離婚や失恋、失職など人生の不遇を経験した後に結婚移民を選択したという要因の存在も研究される（Nakamatsu 2003）。ほかには、国際結婚を受け入れやすい多文化的な地域性や受け入れ地域と同じ儒教主義という文化的要因（Xoan Nguyen & Xuyen Tran：164-167）や、社会関係資本の役割（郝 2010）も挙げられている。さらに、東アジアにおける越境結婚の「第一の転換」、とりわけ中国から日本や韓国、台湾地域への結婚移住について、メゾレベルに注目し、東アジア各国間の歴史的な関係、冷戦後の変

化、及び受け入れ国、地域の政策制度の影響も含めてその形成要因を再検討し、歴史的に埋め込まれた親族ネットワークや、商業型仲介システム、受け入れ地域の移民に対する政策、制度の要因を指摘し、婚姻媒介移住システムと提起する研究がある（郝近刊）。

次は結婚移住者が受け入れ地域に対する影響、および結婚移住者の受け入れ社会への適応の観点からの研究。例えば、日本では 1980 年代に農村地域での日本人男性とアジア人女性との結婚が増えたことにより、1990 年代まではこのような研究が多くなされていた。地域社会学および農村社会学の分野が中心で、主に国際結婚をめぐる社会環境と、アジア人妻の意識と適応という二つの角度から論じられた。前者については、受け入れ側の変容に注目した、山形県の地域住民を対象者とする調査（松本・秋武 1994、1995）や、国際結婚に伴う農村社会と「家」の変化についての研究（右谷 1998）、受け入れ側としての日本を批判したレポート（宿谷 1988）が、例に挙げられる。後者では、山形県の農山村に嫁いだアジア系外国人妻の生活・居住意識をアンケートで調査した研究（中澤 1996）、精神科医で NGO スタッフでもある桑山紀彦による研究（桑山 1996、1997、1999）がある。また、台湾においては、東南アジア籍女性配偶者の文化再生産の役割（張・張 2008）や、生活適応と抵抗戦略（王・瀋 2003、張 2008、林 2006）についての研究などがある。趙は約 200 人の大陸配偶者への聞き取り調査を通して、台湾における彼女たちの生活に政治や国家権力がいかに作用しているのか、またそのような権力はいかに形成されたのかについて論じた（趙 2004a、2004b、2005）。

そして、結婚移住女性自身の主体に関する議論も行われてきた。日本農村に嫁いだ中国人女性の子どもへの教育戦略と、自らの移動のプロセスへの意味づけについての研究（賽漢卓娜 2011）。また、「農村花嫁」のステレオタイプなイメージと実態との乖離を示し、農村社会における結婚移住女性の主体的行為者としての可能性を描き出した研究（武田 2011）。仲介業者を通じて結婚した女性の語りからそれぞれ自分の人生を様々な戦略でたくましく生きようと分析した研究（郝 2012）が挙げられる。

本稿はこれらの先行研究においてまだ注目されていない東アジアにおける越境結婚の「第二の転換」に関して考察する。中国は送り出し側からいかに受け入れるようになっているのか。この「第二の転換」は先行研究の「第一の転換」とどのような違いがあるのかを明らかにする。

本稿で扱う調査データは以下である。2007 年 10 月、2009 年 8 月、2010 年 2 月、2012 年 8 月に中国東北部で行った調査内容。2010 年 3 月、2011 年 9 月に中国とベトナムの国境地域で行った調査。そして、2010 年 2 月にベトナムで中国男性のお見合いツアーに参加し、2011 年 8 月にベトナム北部の送り出しコミュニティで行った調査内容である。調査は主に越境結婚仲介業者、結婚当事者に対する非構造化インタビューと参与観察である。

３．歴史的にみる中国とベトナムの越境結婚

本稿は中国がベトナム女性配偶者を受け入れるようになりつつあることに注目するが、それが具体的には中国とベトナムとの国境地域以外の広域が受け入れるようになったことを指している。それが新たな現象だが、国境地域では中国とベトナムの越境結婚が歴史的

に行われてきた。本稿の中心内容に入る前に、まず、国境地域の状況に触れておこう。

中国とベトナムの間に 1353 千メートルほどの国境線があり、中国側の分類では 12 民族で、ベトナムの分類では 26 民族がこの国境線を跨って暮らしている[2]。これらの民族は中国から一部ベトナムに移住したのが 83.3%ぐらいである。例えば 19 世紀前半に天災や社会の混乱と開拓のために中国にある一部の壮族がベトナムに移住した。また、日中戦争の時に、戦乱から逃げるためにベトナムに移した人もいた。中国広西省龍州県金龍郷其逐村の村民は国民党政府に兵士として捕まえられないようにベトナム側に行った。いまでも、中国側にあるのが下其逐村で、ベトナム側にあるのが上其逐村と呼ばれていて、500 メートルも離れていない（范 1999)。一方、ベトナムから中国に移住してきた民族も数少ないがいる。そして、もともと同じ民族だが、国境線によって両国民になった場合もある。国境線と民族の分布線が一致していない場合にこのような状況が生じる。これらの国境を跨って暮らしている民族は、お互い親戚関係を持つ場合も少なくない。例えば、中国広西省凭祥市の国境地域では、40%の世帯はベトナム側と親戚関係を持っている（范 1999：20)。また、長い間にこの地域の人々にとって、国民国家の概念があまり強くなく、「中国」と「ベトナム」という区別をせずに、住みやすいほうに自由に移動するという状況だった（羅 2010：58)。冠婚葬祭のときに行き来して、生活上もお互い助け合っているのである。無論、これらの関係の中には婚姻を結ぶ関係も含まれている。

このような状況は 1950 年代に中国とベトナムがそれぞれ独立して社会主義国になり、国家の国境管理が厳しくなるにつれて、少しずつ「国家」の影響が入ってきた。1950、60 年代の時に、ベトナム側から中国に嫁いだ女性が多かった。当時中国とベトナムはともに社会主義国で友好的な「兄弟」関係だったため、彼女たちは中国の戸籍をもらい、「ベトナム華僑居留証」も配られて、優遇されていた。その後、1960－70 年代に、中国は文化大革命で混乱し、多くの中国側の村民がベトナムに入った。この時期の結婚も中国側の女性がベトナムに嫁いだケースが多かった。1970 年代から 80 年代の始めごろまで、中国とベトナムの関係が悪化してしまい、通婚関係も止まっていた。1980 年代末に両国の改革開放政策と関係の緩和によって、再び交流が始まったのである（羅・龍 2007)。

2011 年 9 月に筆者は中国とベトナムの国境で調査を行った。その時に尋ねた村では、主に農業・漁業・国境貿易を従事しており、322 世帯のうち 30 世帯ぐらいはベトナム人妻がいる。こちらの男性がベトナムに行って出会った場合もあるし、ベトナムで仕事している中国人が女性を紹介した場合もあり、女性が友達について中国に遊びに来て、そのまま結婚する場合もある。このような越境結婚は 1980 年代から 1990 年代までには多かったという。

このように、中国とベトナムはまず国境を跨って暮らしている民族たち自身の交流がある。国というアイデンティティより、民族アイデンティティが強かった。また、同じ民族でなくても、この地理的近接性が両国民の様々な交流を促した。何も法律的な手続をせずに、両国間にある細道を通して来て、結婚した場合もある。

しかし、現在はこのような民族や地理的近接性と関係なく、新たな形で中国とベトナムの結婚が進んでいる。それを次節から詳しく見ていく。

４.「第二の転換」の実態および要因分析

2009 年頃からより広域で仲介業者を通じてベトナム人女性が越境結婚で中国大陸に入るようになり、急増してきた。その一つの現れとして、中国とベトナムの結婚紹介所の増加がある。筆者が 2009 年にインターネットで「中越婚姻」（中国とベトナムの国際結婚の意味）を調べたところ、ほとんどきちんとしたホームページが出てこなかった。ただ、筆者は当時個人でやっているところを 2 カ所ほど知っていた。それから、2012 年にもう一回「中越婚姻」を入力したら、数多くの結婚紹介所のホームページが出てきた。重複を省いてまとめると、18 社になった。そのほとんどが 2009 年末からできたものである。

このような状況になった背景は二つ考えられる。

一つは前述した先行研究で言われている経済要因。中国はまだ発展途上国だが、2008 年にオリンピック開催し、2010 年に国全体の GDP は世界第二番目になった。このような経済的なプレゼンスが背景にあるだろう。

また、もう一つの背景として、いままでのベトナム人妻の受け入れ国の政策変化があるのではないだろうか。政策はベトナム人妻の流入を制限する方向に変わったのである。台湾では 2005 年からベトナム人妻に対する結婚時の面談制度が厳しくなった[3]。結婚式から面談を受けるまで少なくとも６ヶ月以上がかかることになり、それに全員が面談に通るとも限らなくなった。この面談制度が政府のベトナムとの婚姻数をコントロールする手段だった（Kung 2009:181-182)。その関係でベトナム人妻の数は 2004 年の 1 万件以上から 2006 年の 5 千件以下に減った。それから横ばいになり、増えることはなかった。韓国は 2006 年に結婚移民に対する統合支援対策を出した。その中の一部は国際結婚を管理する法律を制定することで、婚姻ビザの発給や結婚仲介業者などを管理するようになった（宋 2009：80)。そこで、仲介業者を通して結婚する場合が多いベトナム人は 2007 年から減ってきている。

以上のように、いままで主にベトナム人妻を受け入れる地域の政策変化もベトナム人妻の中国への流入をプッシュした一つの要因なのではないか。

では、これらを背景に、いったいベトナム人妻は具体的にはどのように中国に入ってきたのか。以下で筆者の調査に基づいて見て行く。

本稿では筆者が調査を行った仲介業者と中国男性側結婚当事者や希望者の語りを二つの類型にわける。一つは受け入れがコミュニティ内に集中しているケースで、もう一つはインターネットを通じて広範囲で紹介を行うケースである。この二つの類型の仲介業者の紹介に至までの経緯とそれぞれ紹介している男性側の結婚事情をみることで、「第二の転換」の実態とその要因を分析して行く。

（１）越境結婚移住者の送り出しコミュニティから受け入れコミュニティへ

中国東北部というベトナムからかなり遠く、気候もだいぶ違う地域にベトナム人妻が入るようになった。しかし、広範囲ではなく、F 地域に集中している。

この F 地域では歴史的な関係で日本と社会関係資本を持っており、そのネットワークが日本への女性の婚姻移住を推進した（郝 2010)。それから、韓国にも日本ほど多くないが、女性の婚姻移住も行われてきた。当地域政府の 2010 年統計によると、人口 23 万人で、海外に居住している華人がおよそ 12000 で、華僑 26000 人ほどで合わせて 38000 人である。

その中でも、日本には一番多く 35000 人となっている。F 地域に住んでいる華僑華人の親戚らがおよそ 48000 人である。このような状況にある F 地域は 2008 年頃からベトナム人女性結婚移民が入ってくるようになった。2010 年頃には 100 人ほどで、2012 年になると、1300 人ぐらいと増加した。

では、具体的にはその実態はどうなっているのだろうか。F 地域に最初にベトナム人妻を仲介してきた Q さんと、実際に結婚した事例を通じてみることにする。

１）仲介業者

Q さんは 30 代女性で 2010 年頃までに 80 人ほどのベトナム人妻を F 地域に紹介してきた。Q さんはもともと F 地域の女性と韓国人男性との結婚を仲介していた。その韓国側のパートナーにベトナム人妻紹介のことを薦められた。韓国では韓国男性とベトナム人妻の結婚が多かったので、ベトナム人妻を F 地域の独身男性に紹介することを薦められたのである。そして、ベトナム側のパートナーも紹介してもらった。その人はベトナムで生まれ育った中国系の人。お見合いの時の通訳者は台湾に嫁いだベトナム女性。このようなネットワークで Q さんは F 地域の男性とベトナム女性との国際結婚を紹介し始めた。

２）結婚事例

中国人夫 E さん　30 代前半　会社員　初婚

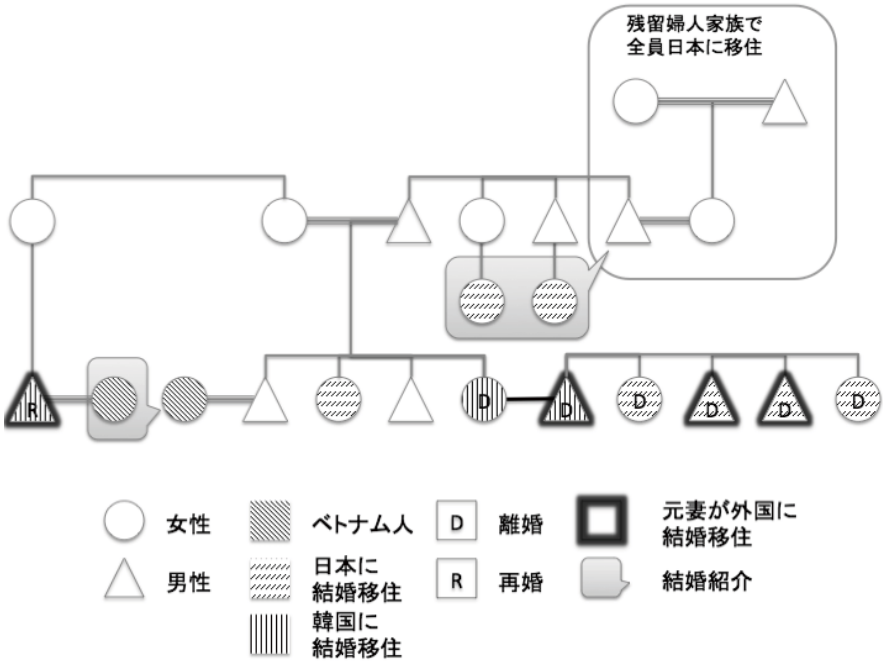
ベトナム人妻 G さん　20 代後半　主婦　初婚

E さんは F 地域にある普通の会社員である。収入は中の下のレベルで、町の中心部に両親と同居している。E さんは末っ子で、兄と二人の姉がいる。姉たちはそれぞれ日本と韓国に移住している。

姉たちの外国移住は父親側親戚の影響があった。父側おじさんの義理の母は残留婦人で、家族全員を連れて日本帰国した。日本に移住したおじさんは従姉妹二人を結婚紹介で日本に移住させた。その状況を見て、E さんの姉も日本に行きたいと思うようになり、自ら結婚仲介業者を通じて、日本人と結婚して日本に移住した。

もう一人の姉は地元の男性と結婚していたが、その夫側の兄弟姉妹が全員離婚で、離婚した女性がみな日本人と再婚し日本に移住している。この姉も結局離婚で、韓国に出稼ぎに行き、その後韓国人と結婚した。

E さん自身も日本や韓国に行くことを望んだが、男性が外国に行く道があまりない。結婚も考えていたが、なかなか相手に恵まれていなかった。身近な人たちの中にこれだけ離婚して外国に行く女性が多く、E さんは地元の女性との結婚を長続きするかと躊躇した。その時に、ベトナム人仲介業者が何人かベトナム人女性を F 地域に連れてきて、親戚のすすめでその中の一人 G さんと会いに行った。G さんも E さんの家に行って、状況を見てから結婚に同意した。その後、二人でベトナムに帰って結婚式と手続きをし、それから一緒に中国で暮らすようになった。G さんはベトナム南部の出身で、姉が韓国人と結婚して韓国に移住している。G さんはその後自分のいとこを E さんの離婚で元妻が韓国人と結婚し韓国に移住した従兄弟に紹介した。



図−２　Ｅさんの家族関係図

Ｅさんの家族の移住状況を上記の図−２で簡単に描いた。このＥさん家族の事例に表されているように、Ｆ 地域ではベトナム人との結婚が結婚難の独身男性と元妻が日本や韓国に移住した離婚男性の一つの選択となった。

３）考察

①　トランスナショナル仲介業者のネットワーク

ベトナム人がはるばる遠く中国東北地域に嫁いできたのは、前述したインタビューからわかるように、仲介業者によるものである。特にＦ地域に集中しているのは、この地域に日本や韓国との社会関係資本でできているネットワークがあり、そのネットワークによって通婚圏をベトナムに広めた。Ｑ さんがベトナム妻の仲介をできたのは、韓国業者によるベトナム業者の紹介で、このトランスナショナル仲介業者のネットワークがＦ地域の越境結婚に大きく作用した。

②　Ｆ地域における婚姻市場の変容。

前述したＥさん家族の事例からわかるように、Ｆ地域では他地域と同じように経済的な理由或はその他の理由で結婚できていない男性のほか、女性の日本人や韓国人と結婚することにより、地元男性と結婚する女性の減少及び離婚も、Ｆ 地域男性の独身を促した。Ｆ地域では女性が地元男性のほかに、日本人や韓国人との結婚も選択肢になった。婚姻市場にの変容で簡単に結婚や再婚ができない男性はベトナム人との結婚を選んだ。このＦ地域の中で越境結婚の連鎖が起きているのである。

（２）都市部男性の選択

前述したF地域のように、あるコミュニティに集中するのではなく、広範囲で男性を募集し、結婚仲介を行う業者が存在している。その中で、中国男性とベトナム女性との結婚を最初に社会の話題にし、マスコミにも注目されたDさんがいた。筆者は2010年2月にベトナムでDさんが主催するお見合い結婚ツアーに参加し、Dさん及びツアー参加者の中国男性5人にインタビューを行い、お見合いのプロセスを観察することができた。この内容および2012年にインターネットを通じてインタビューした仲介業者Mさんの語りを通じて状況を見ていきたい。

１）仲介業者

中国男性とベトナム女性との結婚が中国で社会的な議論になったのは、2009年10月に南京市のDさんが単身でベトナムに行き、ベトナム女性と結婚した経緯を詳細にインターネットにアップしたことをきっかけとなった。Dさんが書いた内容はインターネット上で広がり、マスコミにも注目され、新聞やテレビにも出るようになった。結婚後、彼は妻と一緒に中国とベトナム女性との結婚を仲介するようになった。

Dさんは中国で離婚した後、再婚しようとする時になかなか理想的な相手と出会えていなかった。それから、ある機会に、インターネットで「親戚がベトナム人と結婚した[4]」という文章を目にして、その内容に興味を持つようになった。それから、関係資料を探して、ベトナム人妻は台湾や韓国でたくさんいることを知った。台湾人のベトナム人妻に対する高い評価を見て、Dさんは自分もベトナムに行ってみることにした。ベトナムで華人と知り合い、その華人の通訳を頼りに各地に移動して体験した。そのうち女性を外国人に紹介するベトナム側の仲介業者と知り合った。お見合いを何度かして、今の妻と結婚したのである。その経験を写真入りでインターネットにアップして、話題になった。

その後、中国男性とベトナム女性の結婚を仲介するようになった。インターネットのHPを通じて、中国各地の都市部男性を中心に紹介していた。

仲介業者のMさんは、まさにインターネットでこのDさんの経験を見て、ベトナム行きを決めたのである。QQ[5]で中国語できるベトナム人を探して、三ヶ月ほどチャットして、ベトナムで通訳してくれることを約束してもらい、旅行のつもりでベトナムに出発した。その後、ベトナムで仲介業者と知り合って、ベトナム女性と結婚し、現在仲介業者をしている。

２）都市部中国男性

次に実際にお見合いツアーに参加している中国男性5人と、Dさん、Mさんという自身がベトナム女性と結婚している仲介業者2人の結婚理由に関する語りから実態の分析を試みる。まず、インタビューした男性たちのプロフィールを下記の表にした。

表-1　中国男性プロフィール

	年齢	住所	職業	婚姻状況
A さん	30 代後半	北京市	IT 関係	未婚
B さん	30 代後半	広州市	弁護士	未婚
C さん	40 代前半	石家庄市（河北省）	中小企業社長	未婚
D さん	40 代前半	南京市	ダンススクール経営者	離婚
M さん	40 代前半	連雲港市（江蘇省）	化粧品販売	離婚・子供一人
E さん	40 代後半	上海市	デザイン系仕事	離婚・子供一人
F さん	50 代前半	深圳市	出版関係	離婚

このプロフィールから男性たちは都市部在住の 30 代後半からの独身者か離婚者だとわかる。では、彼らはどうしてベトナム人と結婚しようと思ったのだろうか。彼らの語りから見ていく。

【中国女性の問題点】

「中国で相手を探したときに、みんなまず収入を聞くし、それだけでなく、身長も外見もこだわっている。高いレストランに連れて行ってもらい、百貨店でショッピングしてお金を払ってもらう。結局彼女たちはわたしの向上心と才能、趣味も多さなどでわたしのことが好きになったのではなく、ただそのお金を狙っているだけの感じで、このような女性と結婚したくないと思った。」(D さん)

「32 歳の時、最後の彼女と別れてから、親や友達の紹介で何度もお見合いした。そのときに、まずどうやってきた？いまどこに住んでいる？と聞かれる。タクシーで来た、親と一緒に住んでいると言うと、もう終わりだ。」(A さん)

「いままでがんばってきて、親や兄弟たちをよく世話したい。でも、中国の女性たちに許されない。わたしが世話するときに、よく干渉してくる。そうすると悩ましい。別に彼女に世話してほしいわけじゃない、わたしが世話する時に干渉しないでほしいだけ。」(C さん)

「女性はみんな男性に大切にしてもらいたい、わたしたち男性も女性にやさしくしてもらいたい。わたしのことを認めて、心から愛してくれる人。そうすると満足の感じがして幸せを感じる。」(E さん)

「中国ではみんな一人っ子で、わがまま。よく遊ぶ。わたし以外ほかの人とも付き合ったりする。」(M さん)

【理想的な結婚相手】

「わたしは初めて結婚した時は 25 歳で、その時何も基準がなかった。一緒にいて楽しければそれでよかった。離婚した後は 30 歳までで子どもがいないというのが条件だった。」(M さん)

「男性はどうしても女性の外見が気になるね。まず外見。それから性格がやさしいかどうか。」(F さん)

「35 歳や 36、7 歳の女性は子どもを産むにはリスクがあって、そんなに生みたくないかもしれない。だから、もうちょっと若い人がいいと思う。30 歳、28 歳ぐらいで、年齢差が 10 歳以上離れている人。」(A さん)

【ベトナム女性のよさ】

「ベトナム女性たちはただあなたが勤勉か、向上心があるかどうか、自分を大切にしてくれるかどうかだけ気になる。年齢や外見、過度のお金の要求などしない。」(D さん)

「わたしが惹かれたのがやさしいところだ。あなたのことを大切に思っていることだ。もう 10 人ほどお見合いしたが、将来の夫に対して何か要求があると聞いたら、誰も家を持っているかどうか、貯金どのぐらいあるかどうかを聞かない。ただはずかしそうに自分を愛してくれて大切にしてくれたらいいと微笑みながら答える。このようなプアな気持ち、もう中国大陸で見つからないと思う。」(F さん)

「ベトナム女の子の美徳を言うと、本当に心から愛するに値する。わたしは感動した。自分の若いときを思い出した。そのときに最後に別れてしまったけど、でもそのときの恋愛はまだある種の純粋さがあって、精神があった。もうそれをなくしてどのぐらいたったか。ベトナムに来て、女性たちに気になることや要求を聞いたら、その答えに本当に感動する。物質的ではなく純粋な感じで。それを聞くと、自分がよっぽど自己中心じゃないかと反省している。本当にわたしは彼女たちに何をしてもいいと思った。」(C さん)

【中国での結婚難】

「中国にいたときに、もともと話が合う、フィーリングも合う相手と一緒に家庭を築いて一緒にがんばろうと考えた。でも、この歳になると、しかたなくもう年齢の差がある女性との結婚しか望まない。でも、そうすると、考え方などいろいろなことがお互いずいぶん違う。なかなかフィーリングも考え方も合う相手が見つからない、ほとんどあきらめている。」(C さん)

「中国でもよい女性がいるけど、つき合うにはそれなりの条件がある。歳の差がそんなに大きくない条件だ。わたしたちのように、10 歳以上歳が離れている人を希望すると、彼女たちはまず生活レベルを考える。もし生活レベルが普通なら、どうしてあんなに年上の人と結婚するのか。本当に現実的だ。二人の歳がそれほど離れていなく、お互い愛し合って、それがもちろん一番理想的。しかし、その場合、男性は潜在的な能力が必要。もし潜在的な能力がなければそれもうまく行かない。

若いときは内向きで明るく元気な男性に負けた。歳をとるにつれて、社会経験が増えて、やっと自分を表現できるようになって、実力もついてきたけれど、今度また年齢が問題になった。」(A さん)

「人間の一番柔らかい部分は一番鮮やかな部分、つまり、愛を渇求する部分だ。愛は一番感動するもの。人はあくまで幸せを追求している。お互いのことを慕いあって、老けるや病んでしまうことで相手を見捨てない。金銭と関係ない。でも、いまの世の中、それが贅沢なもの。」(E さん)

３）考察

① メディアの役割

以上仲介業者のインタビューから、インターネットやQQのような通信ツールが大きな役割を果たしたことがわかった。DさんやMさんはインターネットの記事を通じて、越境結婚のことを知り、自分たちもそのような結婚をしたいと望んで、ベトナムに行ったのである。前述したように、ベトナムと中国の越境結婚は最近からではない。しかし、いままでは主に国境の近くで交流のある地域に行われていたが、インターネットによる早い広い情報伝達で、より多くの人々がそれを認識するようになった。また、Dさんは写真入りで細かく記事を書いたので、それを信用する人々がいた。筆者が仲介業者の情報を調べた時に、同じように自分もベトナム人と結婚して、現在仲介業者をしている男性は自分でドキュメンタリーを作ってインターネットに流していることもわかった。ドキュメンタリーはシリーズになっており、ベトナムで妻を捜した経験、中国で留学しているベトナム人学生に越境に対する考え方を聞く、ベトナムという国の紹介、ベトナム人妻との結婚後の生活、お客様の結婚プロセスと感想などに分けられている。このようなビデオがインターネット上で流れていることで、より多くの人にベトナムとの国際結婚を知られるようになったと考えられる。また、MさんはQQで結婚紹介ビジネスをしている。中国ではQQが商談、アフタサービス、連絡の重要なツールになっている。また、「QQ空間」というアカウントごとにホームページがついており、日記を書くことや、写真やビデオをアップすることができる。Mさんの「QQ空間」で国際結婚の状況、結婚現場の写真やビデオが載せられて、宣伝になっている。このように、中国とベトナムとの国際結婚の広がりには各種のメディアが重要な役割を果たしていることがわかった。

② トランスナショナルネットワーク

言葉が相違する両国の人々を結婚に結びつけるために、言語、国境などの壁を超えなくてはならない。前述した仲介業者に対するインタビューから、単身でベトナムに妻を捜しに行っても、結婚できたのは、両国の言葉ができる華人・中国人・ベトナム人の存在である。この人たちの存在が力を発揮することができたのは、中国とベトナムの関係の回復と発展がもたらした結果だと考えられる。2009年1月1日に中国広西省南寧市から列車でベトナムハノイに行けるようになった。1990年代から中国とアセアン諸国の交流や貿易関係が深まり、2010年に中国―アセアン自由貿易圏が形成された。これら一連の政治経済的な変化は無論両国の人々の交流を促したと思われる。

まずは華人の存在。中国の南部の広西省、雲南省、広東省などベトナムに近い地域では、中国側社会が動乱になるときに、ベトナムに移住する人々がいた。日中戦争の時に、中国社会から東南アジアに移住する人が大量に出た。1951年に、ベトナムにいる華人は150万ほどになり、南部135.7万人・北部9万人・中部5.3万人いたと推測されている(郭1996)。しかし、中国とベトナムの国家間の関係が悪化した1978年ごろに、ベトナムで華人排斥が行われた。それで一部の華人が中国に帰ったり、欧米に行ったりして、1979年に93.5万人に減少した(□2006)。1986年ベトナム政府の革新政策が始まって、外国の投資を受け入れるようになった。シンガポール、香港、台湾からの投資がベトナムに入った。その時に華人は大きな架け橋の役割をした(楊2009)。このような華人の存在以外に、近年中国で留学するベトナム人も増えてきた。中国教育部の統計によると、近年ベトナムからの留学生が毎年増えてきており、2011年に中国にいるベトナム留学生は13549人で、第五位[6]になっている。更に、筆者のインタビューでは、仲介業者の通訳・ベトナム側仲介業者と

なる人の中で、台湾にいた（配偶者・労働者・留学など）人もいるという話がよく出た。このように近年国家間の政治経済的な変化によって、交流が増えてきたにつれて、国境を越えるトランスナショナルなネットワークができている。このネットワークは越境結婚の形成に大きな役割を果たしている。

③　中国における配偶者選択基準の変遷・同類婚法則の不変

本稿で取り上げた中国都市部男性は、結婚相手の要求と年齢のギャップが結婚難に結びつけると語った。これは中国における配偶者選択基準の変遷と同類婚法則の不変が理由であるかと考えられる。

中国では 1950 年 5 月に初めての婚姻に関する法律で『婚姻法』が頒布され、それまでの「封建的」な売買婚や親が結婚を決めるなどのことが廃除されるようになった。当時、自由に結婚相手を求めることが第一に大切なことであった。しかし、社会の政治経済的な状況によって、必ずしも本当の自由を得たとは言えない。1949－1978 年の間に、結婚相手の選択は政治に大きく左右されることになった[7]。このような状況は中国の改革によって変容した。1980 年代に入り、文化大革命が終焉し、中国は改革開放路線に転換した。それに伴い、人材の養成が急務となり、受験制度が復活され、高等教育制度が正常に回復された。文化大革命中に批判された知識人が改めて重視されるようになり、学歴を有する者が職場で活躍し、収入もその学歴に結び付けられるようになった。そのため、学歴が配偶者の選択基準となり、大学出の男性が多く女性にもてはやされるようになった（蘇林、2005：127）。配偶者を選択する際、職業、社会的地位が重視されるようになった。それから、1990 年代の中期から、中国では、経済体制が全面的に転換され、市場経済が大きく発展した。

このような配偶者選択基準の変化について、上海とハルピンという二つの地域で行われたアンケート調査から、結婚相手を選択する際に健康・まじめ・性格が合う・やさしいというのがどの時代でも重視されているが、学歴・職業・収入・住居などの社会経済的条件と容貌・スタイルなど外見的条件は近年に重視されるようになった（徐 2000）。その理由は 1980 年代まで長い間に中国では「物質主義」「金銭万能」という考え方が「悪」だとされて批判された。また、計画経済の時代で職業選択の自由もなく、給料もたいした差がなかったので、職業や給料もそれほど重視されなかった。そして、相手の容貌やスタイルにこだわると、「外見重視中身軽視」のよくない考え方だとされて、「外見で人を判断してしまう」「動機不純」というふうに言われるので、人々はそのような要求を抑圧した。だが、改革開放してから、金銭や物質的なものは婚姻の不可欠な基礎だという考え方が戻り、相手の容貌や雰囲気に惹かれるのも「生物的」な選択と言われなくなり、人々は両方重視するようになった。知り合う形や魅力なども経済的要求に影響を与える。自分で知り合って、相手の外見や性格がよいとされる場合、その人に対する経済的な要求もそれほど高くない（徐 2000）。このように、中国における配偶者選択の基準が「外見・コミュニケーション力・経済力」の総合力をみるようになったと言えよう。このような選択基準で一部の都市部男性の結婚難とつながっただろう。

中国では配偶者選択基準は時代によって変わってきたが、しかし、同類婚という法則は変わっていない。多くの研究で結婚同士は年齢、学歴、家庭背景、社会経済的地位などで類似していることが示されている（李 2008、張 2003）。その中で年齢だけを見ると、やはり年齢同類婚の傾向が大変強い。都市部の北京市夫婦の初婚年齢と夫婦年齢差のデータか

らの分析では、女性は初婚年齢が上がるにつれて、夫婦の平均年齢差が小さくなる。一方、男性は初婚年齢が上がるにつれて、夫婦の平均年齢差が大きくなる。また、男性非初婚と女性初婚の夫婦の平均年齢差が一番大きく、男性初婚女性非初婚の夫婦の平均年齢さが一番小さい。男性の初婚年齢が 1 歳あがると、夫婦の年齢差が 0.53 歳増加する。全体的に夫婦の年齢が 3 歳以内がまだ 7 割ほどである（高 2012）。中国本稿で取り上げた男性たちは年齢差 10 歳以上の女性との結婚を希望していることが前述のとおりである。男性が普通自分より若い女性を妻とし、年齢の増大につれて、自分よりさらに若い女性を妻とする傾向は多くの国や文化圏に存在している（Buss、1989）。しかし、歳をとるにつれて、このような「理想的な」結婚が難しくなっていくのである。

５．結論

本稿は東アジアにおける越境結婚の連鎖に注目し、主に中国が日本、韓国、台湾地域への結婚移住者の送り出しからベトナム結婚移住者の受け入れに変容しつつある「第二の転換」を中心に、その実態を明らかにし、要因を分析した。

韓国や台湾が日本への送り出しから中国などから受け入れるようになった「第一の転換」は主に東アジア各国の国交樹立や回復、関係改善の中、歴史に埋め込まれた親族ネットワークの復活や、ビジネス投資などによる人のネットワークを通じて、結婚移住が行われてきた。仲介業者はその間に形成したのである。しかし、本稿で述べた「第二の転換」は「第一の転換」の形成過程と相違している点もある。この「第二の転換」の形成に、既存のトランスナショナル仲介業者のネットワーク、新しいメディアが大きな役割を果たした。韓国や台湾で行われてきたベトナムとの結婚が言葉、人のネットワークでの蓄積になり、中国への送り出しを容易にした。

また、中国では 2003 年 10 月に現在中国最大の恋愛・結婚相手の出会いサイトができ、2010 年 1 月に中国で一番人気のお見合い番組ができた。中国は改革開放以来、経済の発展とともに、人の移動も増えて、いままで限られていた出会いの範囲も広がり、このようなメディアの発達により結婚相手と出会う手段も多様化してきた。また、配偶者選択の基準も政治的な影響がなくなり、現在は外見・性格・経済力などの総合力をみるようになった。結婚は貧しい時代より自由が増えた一方、難しくなっている。本稿で述べた中国とベトナムの国際結婚もこのような中国社会の変容の中で生じている。中国の一部の結婚適齢期を過ぎた未婚男性や離婚男性は歳の離れた「理想的な」女性との結婚を希望している。外国の「他者」を「理想化」することによって、結婚に至る。この「理想化」するプロセスは仲介業者の宣伝でもあり、当事者の自己欺瞞でもある。しかし、誰も「理想的」な相手を求め続けることで、越境結婚が難しい時代の一つの道になっている。

本稿はこの「第二の転換」の内容と要因を分析した。しかし、仲介業者や結婚プロセスにおける問題がまだ議論が必要である。それを含めて、今後もこの課題に関する研究を深めていきたい。

注

[1] 本稿において、「越境結婚」は国際結婚を含む国境やその他の政治的境界（例えば中国大陸と台湾)、領土の境界を越える結婚を指す。
[2] 中国とベトナムの民族を区別する基準が異なっている。中国は基本的にスターリンが提唱した四つの特徴で民族を識別した：共同言語、共同地域、共同経済生活、共同心理素質。しかし、ベトナムはスターリンが提唱した四つの特徴を踏まえて、三つの基準にした：言語、文化生活、民族自覚意識。その中でとりわけ民族自覚意識が重視された（范 1999)。
[3] この面談制度は 1999 年までには個人面談の形だった。しかし、申請する人が増え、一日 10～20 人から一ヶ月におよそ 1000 人までになったので、1999 年から集団面談に変わった。一回に 100 人～150 人ぐらいが同じ部屋に集まり、台湾側の関係者による説明が行われる形だった。それから、台湾人とベトナム人の婚姻数が増加し、毎年 10000 人以上になった。その後、2004 年に、台湾の監察院が公文書を出して、ベトナム人妻があまりに増加していることを外交部領務局に注意した。それを受けて、領務局は面談を確実に行うことを要求した。そこで、2005 年 1 月 1 日からまた個人面談に変更し、毎日 20 人まで面談を受けることになった。
[4] 2008 年 7 月に中国のある有名なインターネット雑談室で出た文章。内容は 28 歳の外見・性格も普通で、高校教師で年収 5－6 万元（約 100 万円）の親戚が、21 歳のきれいなベトナム女性と結婚したことについてみんなから意見を聞くものである。
[5] 中国の人気チャットツール。様々な機能を持つ。プライベートでもビジネスでも使われている。
[6] 中国教育部の統計では、2011 年在中国留学生数の上位五位は韓国 62,442 人、アメリカ 23,292 人、日本 17,961 人、タイ 14,145 人、ベトナム 13,549 人となっている。
[7] 蘇林（2005：127）によると、50 年代に反右派闘争、60 年代後半に「資本主義の道を歩む実権派」の打倒、そして、ブルジョア知識分子を批判する全中国の革命化を呼びかける文化大革命があった。1966 年の夏、中国全土で異常な政治闘争が勃発し、紅色政治が氾濫し、人々の「出身階級」による国民を「紅五類」(労働者、貧下中農、兵士、革命幹部、革命烈士及びその子弟)と「黒五類」にわけ、結婚相手を選択するとき、「出身階級」の「紅」か「黒」かがきわめて重要な選択要素となっていた。「黒五類」は文化大革命の粛清の対象となり、「紅色家庭」の者と結婚すると、少なくとも政治風雲に巻き込まれることなく、進学、就業、昇進などで不利にならず、安定した家庭を築ける。

引用文献

日本語文献

郝洪芳,2010,「日中国際結婚に関する一考察――業者婚する中国女性の結婚動機を中心に」,『京都社会学年報』，京都大学文学部社会学研究室 18：67-81.

――，2012,「業者婚をした中国女性の主体性と葛藤」 落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』 京都大学学術出版会，231-252.

――，近刊,「婚姻媒介移住システム―東アジア間における越境見合い婚の形成」.

伊藤 るり，2002,「国際移動とジェンダーの再編」原ひろ子編『比較文化研究―ジェンダーの視点から』，放送大学教育振興会，229-52.

桑山 紀彦，1995， 『国際結婚とストレス』 明石書店.

――, 1997,『ジェンダーと多文化』明石書店.

――, 1999,『多文化の処方箋』 アルク.

松本 邦彦・秋武 邦佳, 1994, 「国際結婚と地域社会 ： 山形県での住民意識調査から(その 1)」 『山形大学法政論叢』山形大学法学会 1：160-125.

――, 1995,「国際結婚と地域社会 ： 山形県での住民意識調査から(その 2)」『山形大学法政論叢』山形大学法学会 4：206-178.

中沢 進之右, 1996,「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居住意識--山形県最上地方の中国・台湾,韓国,フィリピン出身者を対象にして（特集 2 わが国における国際結婚とその家族をめぐる諸問題)」『家族社会学研究』日本家族社会学会 8: 81-96.

賽漢卓娜, 2011,『国際移動時代の国際結婚』 勁草書房.

佐藤 隆夫, 1989,『農村(むら)と国際結婚』日本評論社.

宿谷 京子, 1988,『アジアから来た花嫁』 明石書店.

宋 營, 2009,「韓国における国際結婚女性移住者に対する政策の転換とその要因」, 政策科学 17 (1)：77-90.

蘇林, 2005,『現代中国のジェンダー』 明石書店.

武田 里子, 2011,『ムラの国際結婚再考』 めこん.

右谷 理佐, 1998,「国際結婚からみる今日の日本農村社会と「家」の変化」『史苑』, 立教大学史学会 59 (1):72-93.

中国語文献

范宏贵，1999,〈中越两国的跨境民族概述〉 ,《民族研究》6：14-20.

郭明, 1996,〈华侨华人在越南的沉浮与前途〉,《中国东南亚研究通讯》, 4：4-6.

倪晓锋, 2008, 〈中国大陆婚姻状况变迁及婚姻挤压问题分析〉, 《南方人口》, 1：59-64.

林开忠, 2006,〈跨界越南女性族群边界的维持：食物角色的探究〉,《台湾东南亚学刊》, 3(1)：63-82.

刘娟, 赵国昌, 2009,〈城市两性初婚年龄模式分析——基于中国综合社会调查 2005 年度数据〉, 《人口与发展》, 4：13-21.

李煜, 徐安琪, 2004,《婚姻市场中的青年择偶》上海社科院出版社.

李煜, 陆新超, 2008 ,〈择偶配对的同质性与变迁—自致性与先赋性的匹配〉,《青年研究》.

罗柳宁, 龙耀, 2007,〈中越边境跨国婚姻的流变及其思考〉,《白色学院学报》, 20(1):15-21.

罗柳宁, 2010,〈例论中越边境跨国婚姻建立的基础---兼论“无国籍女人”的身份〉,《广西民族研究》1:57-61.

王宏仁, 沈悻如, 2003,〈融入或逃难？“越南新娘”的在地反抗策略〉萧新煌主编《台湾与

东南亚：南向政策与越南新娘》，249-284.

王英侠，徐晓军，2011，〈择偶标准变迁与阶层间的封闭性—以 1949 年以来择偶标准变迁为例〉，《青年探索》，1:47-51.

夏曉鵑，2002，《流離尋岸—資本國際化下的“外籍新娘”現象》唐山出版社.

徐安琪，2000，〈择偶标准 :五十年变迁及其原因分析〉《社会学研究》6:18-30.

闫彩琴，2006，〈二战后越南华人的政策演变探析〉，《东南亚研究》，6：77.

杨平秀，2009，《二战后至今越南华人华侨历史研究》 江西师范大学硕士学位论文.

张菁芳，2008，〈台湾地区外籍配偶适应生活之社会需求初探〉，《中华行政学报》5: 165-174.

张亭婷，张翰璧，2008，〈东南亚女性婚姻移民与客家文化传承：越南与印尼籍女性的饮食烹调策略〉，《台湾东南亚学刊》，5(1)：93-146.

趙彥寧，2004a，〈公民身份、现代国家与亲密生活：以老单身荣民与“大陆老娘”的婚姻为研究案例〉，《台湾社会学》，8：1-41.

——，2004b，〈现代性想象与国境管理的冲突：以中国婚姻移民女性为研究案例〉，《台湾社会学刊》，32：59-102.

——，2005，〈社福资源分配的户籍逻辑与国境管理的限制：由大陆配偶的入出境管控机制谈起〉，《台湾社会研究季刊》，59：43-90.

英語文献

Buss, D.M., 1989, "Sex Differences in Human Mate Preferences: Evolutionary Hypotheses Tested in 37 Cultures", Behavioral And Brain Sciences, 12:

Kung, I.C., 2009, "The Politics of International Marriages: Vietnamese Brides in Taiwan", in Wang, H.Z. and Hsiao H.H.M. eds., Cross Border Marriages with Asian Characteristics, Center for Asia Pacific Studies Research Center for Humanities & Social Sciences Academia Sinica, 177-188.

Nakamatsu, T., 2003, "International Marriage Through Introduction Agencies: Social and Legal Realities of 'Asian' Wives of Japanese Men", in Piper, N., Roces, M. eds., Wife or Worker? Asian Women and Migration, Rowman & Littlefield Publishers, 181-201.

（Hao Hongfang/ 京都大学）